

# 新しい経済システムを考える

資本主義の弊害を克服する永続的で貧困のない新しい経済システムを提案します

## 新しい経済システム案 - 目次まえがき

### 第一章 新しい経済システム

現代の社会システムの問題点

理想の社会システムは存在しないのか？

お金は人類に必要不可欠なものなのか？

身体システムに学ぼう

通貨は劣化しなければならない

そもそも通貨の働きとは

通貨が劣化しなければならない理由 ～循環～

お金が循環すれば景気が良くなる

収入や貯蓄額に上限を設ける

利子を取ることを禁じる

お金の分配と必要労働力の分配(仮)

不労所得者は社会の害悪

社会に大きく貢献する職業とほとんど貢献しない職業 ～無駄の多い競争～

失業率が高いことは問題ではない

### 第二章 新しい経済システムで社会はこうなる(かも)

国家が口座を管理する

減価システムの導入方法

上限額の設定方法

このシステムでは人が働かなくなるという心配はないのだろうか

新しい社会システムで人々の暮らしはどのように変わるか ～貧富の差～

新しい社会システムで人々の暮らしはどのように変わるか ～欲望～

新しい社会システムで人々の暮らしはどのように変わるか ～取引～

新システムで証券会社、証券市場はどうなるか

新システムで銀行はどうなるか

新システムで株式市場はどうなるか

新システムで企業はどうなるか

税はどのように徴収されるか ～税務署の役割～

新しい経済システムは環境に優しいシステムなのか

私たちの生活はどうか変わるか

政府はどのようになるだろうか

### 第三章 どのように新しい経済システムを導入するか

トップダウンではなく、ワーキングプア層から改革が始まる

新しい循環システムの構築を目指す

通貨に頼らない新しい交換システムを構築する

新しい通貨システム下での流通の様子

新しい経済システムは資本主義を崩壊に導くのだろうか？

#### 第四章 補足事項やQ&Aなど

身体がシステムがモデルだとしたら、心臓の役割は銀行なのではないか？

現在の資本主義国家の繁栄は企業の競争による結果ではないのか？ 競争をしなくて進歩があるのか？

どうしたら社会を発展させる望ましい競争ができるようになるのか？

通貨の価値が減っていきなんて聞いたことがない、そんなのが本当にうまくいくのか？

#### あとがき

#### まえがき

世界的金融危機、失業率の増加、ワーキングプア層や低所得者層の増加、格差の問題、自殺者の増加....。

これらの問題を政治家はどう解決するのだろうか？

経済学者はその解決方法を知っているのだろうか？

テレビのコメンテーターは打ち出される様々な経済政策に対して批判をするが、代替案を持っているのだろうか？

現代の金融資本主義はノーベル経済学賞を受賞するような頭のいい人によって創りあげられたが、世界を大混乱させたうえ、破綻してしまっただけ。多くの人はこのような資本主義システムは持続可能なものではなさそうだと薄々感じている。しかし、誰も新たな経済システムを提示することができず、政治家も、経済評論家もあてにならない。

共産主義が崩壊し、資本主義も多くの問題点を露呈してきた現代において、どのような社会システムが必要とされるのだろうか。

そもそも理想的な社会システムなど存在するのだろうか？

もし、理想的な社会システムが存在するとするならば、それは資本主義を修正したものなのだろうか、それともまったく新しいイデオロギーなのであろうか？

私は現代の諸問題を解決する理想的な社会システムは存在すると考える。

このサイトでありきたりな経済論をぶちまけるつもりはない。むしろ、大胆な社会システムを提案したいと考えている。批判も覚悟の上である。

ただし、批判するならそれなりの覚悟で批判してもらいたい。少なくとも最後まで読み、論の流れを理解した上で批判していただきたいし、可能であるならさらなる代替案を示していただきたいと思う。

ここでは全く新しい社会システム論、経済システム論、イデオロギー論を展開していくつもりだ。

# 第一章 新しい経済システム

## 現代の社会システムの問題点

新しい経済システムを考える前に、現代の社会システムの問題点をいくつか挙げてみよう。

- ・貧困の問題(格差問題)
- ・失業率の問題
- ・派遣労働、非正規雇用の問題(不安定な労働の問題)
- ・ワーキングプアの問題(働いても貧しいという問題)

その他の問題として、

- ・環境問題(この地球が人間にとって永続可能かどうかという問題)
- ・異常気象の問題
- ・金融資本主義の問題
- ・犯罪の増加
- ・自殺者の増加

これらの諸問題を解決する社会システムが求められている訳だが、そういったものは存在するのだろうか？

「そんなものなどありえない」と多くの人は言うだろう。

「そんなものがあれば、とくに政治家や大学教授や評論家を取り上げているはずだ」と考えるだろう。

そんなものがないと安易に否定するのは簡単だ。しかし、そういった解が存在しないということは証明されていない。

さあ、これからその解を解いてみよう。

## 理想の社会システムは存在しないのか？

貧困の問題を考えてみよう。

「お金がないから生活できない、生きて行けない」という人がいる。

しかし、動物はお金がなくとも生きて行ける。ライオンも、シマウマも、メダカも、アリもお金なしに生きている。チンパンジーが店で買い物をするのを見たことがあるだろうか？ もちろん、ハチ、アリ、サルなどの社会的な動物もお金がなくとも暮らしている。彼らはお金がなくとも協力し合い、それぞれの役割を果たし、彼らの社会に貢献し、自分の居場所を持っている。馬鹿バカしい話だと思ふ前に、なぜそうなのかを考えてみる必要があるのではないだろうか？

私たちの身体は約60兆個の細胞でできている。世界人口の約1万倍だ。そんなに細胞の数は多いのに、私たちの細胞は飢えることなく、それぞれの役割を果たし、新陳代謝をしていく。

養分を吸収する小腸が養分を独り占めすることはないし、髪の毛の先の細胞や足の爪の先の細胞が飢えてしまうこともない。

身体にとっては当たり前のことが、この世界では実現されていない。この身体のシステムを私たちの経済システムに利用することはできないだろうか？

マルクスが考えた共産主義というイデオロギーが間違いであったことは既に歴史が証明した。人類は壮大なる実験の結果、共産主義というイデオロギーは人を幸福にしないということを確認した。

このサイトで述べていくのは、共産主義でもなく、資本主義でもない新しいイデオロギーである。修正資本主義といったものではない。完全なるパラダイムシフトである。

ここで注意していただきたいのだが、理想とする経済システムにどのようにシフトするかという方法論は後の章で考えることにする。この

章ではまず理想の経済システムの完成形をイメージして欲しい。仮に理想の経済システムがあるとするなら、それはどのようなものであるかということをもっと考えてみよう。

### お金は人類に必要不可欠なものなのか？

現代は投機マネーが世界中を駆け巡り、様々な問題を引き起こしている。もはや経済ではなく、マネーゲームである。

私たちが日常で使うお金、つまり財やサービスとの交換に使われるお金は、お金全体の1~2%であると言われる。大部分のお金は通帳上の数字として存在し、その数字が増えたり減ったり移動したりすることで、人が飢えたり、犯罪が起こったりするのである。たかが数字がそのような力を持つというのは不思議な気がするが、それは現実に行っていることである。硬貨や紙幣といった実体のあるお金でも同様である。考えてみれば、お金などはただの数字や金属片や紙切れで、財やサービスと交換しなければ何の役にも立たないものなのだが、それが人を不幸にするのである。(人を幸福にもするんじゃないかと思うかもしれないが、人を幸福にするのはそのお金と交換された財やサービスが人を幸福にするのである。)

しかし、人はお金に翻弄される。貴重な人生はお金を儲けるために消費され、お金のために人を騙し、人を傷つけ、人はお金の奴隷となっている。

お金は汚いのだろうか？ お金は人類が作り出した道具である。物々交換の不便さを補い、価値の大小を測る尺度となる道具である。道具に対して、美しいとか、汚いという尺度で判断するのは無意味であり、便利が良いか悪いか、欠陥が多いか少ないかなどの基準で判断するのが妥当であろう。したがって、お金が汚いというは無意味であり、私もお金が汚いというつもりは全くない。しかし、お金は重大な欠陥がある道具であると考えざるを得ない。その理由は後述する。なぜならそれを説明する前に理解しておいてもらわなければならないことがあるからだ。

この世界から空気がなくなったら私たちは生きていけない。太陽がなくなっても、水がなくなっても生きてはいけない。それらは人間にとって必要不可欠で、何物にも換えられないものである。

もし明日の朝、この世の全てのお金がなくなったらどうだろうか？ もちろん、社会は混乱し、人類は生きていけないかもしれない。しかし、お金が無い世界でも、人々がお金があった時と同じ活動をするなら、生きていけるはずだ。お金が支払われなくても農家は農作物を作り、企業は製品を作り、小売店は商品を販売するならば、理論上、社会はまわっていかずだ。

もちろん、理論上のことで、実際はそうになると人間社会はまわっていかないだろう。しかし、私が言いたいのは、お金というのは、酸素や水レベルで人が必要とするものではないということである。なぜなら、お金は人々が財やサービスを円滑に交換するための仲介物(仲介の道具)でしかないからであり、直接私たちが必要としているものではないからだ。

ミツバチやサルなど社会的な動物は役割を分担して、協力して種の保存、固体の保存をしている。お金がなくても互いに協力し、社会における自分の役割を果たしている。人間は万物の霊長と言われるが、お金がないと協力できない、社会における自分の役割を果たせないとすれば、私たちはミツバチやサル以下なのかもしれない。

人間社会は動物の社会のような単純な社会ではないから、お金が必要なのだというかもしれない。複雑な社会だから、お金という道具を発明したのだというかもしれない。間違いではないと思うが、私たちは道具であるはずのお金に逆に支配されているようにも感じる。

人間も原始社会では物々交換をしていたという。しかし、物々交換の不便さを解消するために貝殻や石などをお金として使い始めたという。当時、お金は人類にとって画期的な発明だったのかもしれない。しかし、金本位制から脱却し、実体がなく数字としてのみ世界を駆け回るお金という魔物によって、世界中の人が飢えなくてもすむだけの食料があるにもかかわらず、世界は飢餓の問題を抱え、アメリカのサブプライムローン問題が世界中を不景気にしてしまう。

パワーの大きい道具は例外なく使い方によって、大きな善にもなれば、大きな悪にもなり得るという性質を持っている。そのパワーが強大であればあるほど、その傾向は顕著になる傾向がある。それをどう使うかは使う側の問題である。

### 身体システムに学ぼう

今までの話を整理してみると、お金という強大な力を持つツール(道具)が私たちの生活を便利にもしているのと同時に、様々な問題も引き起こしていることが分かった。(少なくとも金本位制の時代頃までは、お金が巻き起こす問題点は現代ほどではなかっただろう。)

しかし、通貨システムが諸問題を抱えているとしても、もはやお金なしでは人類の社会は成り立たないだろう。ミツバチにできることが、人間にはできないのだ。お金は富める人(国)の所にはさらに集まり、貧しい人(国)はさらに貧しくなる。お金の流れは滞り、それは不況と呼ばれる。

ミツバチにも劣る私たちが、そんな私たちも捨てたものではない。

私たちの身体にある約60兆の細胞はうまく調和して働いていて、局所的に飢えることがない。各細胞がそれぞれの役割を果たし、まとまったひとりの人間の身体を形成している。

ここで各細胞を私たち一人ひとりと考え、身体全体を世界と考えた場合、全ての細胞がもれなく生かされている非常によくできているシステムだと言わざるを得ない。各細胞に酸素や養分を運んでくるのは血液(赤血球)である。養分を吸収する腸が栄養を独り占めすることなく、酸素を吸収する肺が酸素を独り占めすることもなく、全ての細胞が生きられるように、適切に養分や酸素が分配される仕組みがそこにはある。

私たちの生命は各細胞のバランスのとれた分業で成り立っていて、手が食物を口に運び、歯がそれを噛み砕き、胃腸が消化吸収し、血液が身体じゅう全ての細胞に栄養を行き渡らせる。同時に、老廃物を排泄するシステムもうまくできている。

考えてみれば、しばしば経済学者も政治家も、経済やお金の流れを血液にたとえる。この身体の仕組みを手本として経済を組み立てれば理想的な経済システムが構築されるかもしれない。

## 通貨は劣化しなければならない

結論から言って、お金が血液のようになく各細胞、つまり各個人や家庭を循環してその役割を果たすためには、お金も血液と同様に劣化し、最後には消滅すべきである。実際に、赤血球の寿命は約120日と言われる。

この論はにわかには信じられないと思うので、お金の性質などについて丁寧に説明しながら論を裏付けたい。

## そもそも通貨の働きとは

先にも述べたように、お金は互いが必要とする財やサービスを互いに交換するための仲介物として存在している。その機能を交換機能と呼ぶ。

また、お金は貯蓄することができる。以前、お金は本位通貨である金(きん)や銀と交換できるということを保証したものであった。金や銀のように劣化しないものがお金として適切だと考えられていたからであろう。これを貯蓄機能と呼ぶ。

その他、価値を比較する機能、つまり尺度としての機能、数値化できる機能などもあるが、この論を展開するのに重要ではないので特に触れないこととする。

通貨が持つ、交換機能と貯蓄機能は相反する機能であり、この両者の機能は同時には両立しない機能である。つまり、買い物をして通貨を使っている時は貯蓄していないし、貯蓄している時は財やサービスと交換していないということになる。これを踏まえて、今後の論の展開を見ていただきたい。

## 通貨が劣化しなければならない理由 ～循環～

お金が物々交換に代わる交換の仲立ちとなる道具であるとするなら、お金も物と同様に劣化すべきである。物は劣化するのに、お金だけ劣化しないために、お金が物よりも優位な立場に立つこととなる。

あなたが大量の野菜なり果物をもらったとする。食べきれないので、家族に分ける。それでも余るので、親戚にも分ける。それでも余る

ので近所にも配るし、お世話になった人にもお返しをする。それでも余れば食べるのに困っている人に分け与えるかもしれない。腐らせるよりその方がずっといいからだ。多くの人々が喜び、感謝することになる。そうしておけば、また他の人もあなたにあなたが必要とするものを分けてくれるかもしれない。

しかし、お金は腐らないし、持っておくのに場所もとらないので、使い切れないほどの財産を貰っても人に分け与えない。これでは経済はさほど回らない。

もし、お金が劣化するなら、例えば5年間で徐々に消えてなくなるとしたらどうだろう。お金は溜め込まれず、劣化しないうちに必要なものを購入したり、税金を納めたり、人に施したりするだろう。こういう状態だと経済はよく循環する。

## お金が循環すれば景気が良くなる

お金の循環が良い状態を景気が良いといい、循環が悪くなった状態を景気が悪いという。景気が悪くなると景気を良くするために様々な政策を打つ。通貨量を増やしたり、公共事業をしたり、様々な対策を立てる。しかし、それは通貨の循環を促すだろうが、直接通貨を循環させる対策ではない。しかし、通貨の中に自動的に循環するシステムが組み込まれるなら、様々な対策を打たなくても、通貨は自然と理想的な循環をするようになるはずだ。

血液が体内をくまなく循環するしくみを通貨に取り入れるなら、通貨は自然と理想的な循環を始めるだろう。その1つが前述した通貨が劣化するシステムである。

我が国は借金まみれで、国は約 800 兆円の借金を抱えているという。他方、国民の総貯蓄額は 1400 兆円と言われ、その3分の2を65歳以上の高齢者が持っていると言われている。比較的若い世代は生活のために消費をし、通貨を循環させる役割の一端を担うが、高齢者の多くは老後が不安であるなどの理由でお金を溜め込んでいる。溜め込まれたお金というのは死んだお金で、使われるその日までお金としての価値を発揮していない。

仮に通貨を1ヶ月に1%減価させるとするならば、約6年で半減する。つまり、今ここに 100 万円があるとしても、そのまま6年経つと50万円になってしまうということである。この減価分を国が税金として徴収し、国民に一律再配分するなら、通貨の循環は良くなり、貧富の差はかなり縮まるとともに、生活困難者も激減すると予想される。

気が早い人は、そんなことをすると人が一生懸命に働かなくなるはずだとか、国がそのお金でまた無駄遣いをするだろうとか、うまくいかない理由を次々に挙げるだろうが、それらの問題点については後で丁寧に説明するので、まずは一通りの論の流れを理解していただきたい。

## 収入や貯蓄額に上限を設ける

人体をモデルにした経済論ということで、人体を手本にし、酸素や養分を運ぶ血液とお金を比較しながら、お金はどうあるべきかを考えてきた。赤血球が約 120 日で寿命を終えるように、通貨も劣化していくことにより、滞りなく循環するようになる。

循環を促進するもうひとつのポイントがある。収入や貯蓄額に上限を設けるということである。細胞は酸素が供給されなくなった場合に備えて、酸素を過剰に蓄えたりしないし、そのようなことはできない。養分も同様である。だから、各細胞は自分が必要とする分だけの酸素や養分を受け取り、後は他の細胞に回すのだ。人間一固体の体としては、過剰なカロリーは脂肪として蓄えるが、各細胞は過剰に酸素やエネルギーを蓄えたりしない。

人間社会では何億円もの財産を持つ者がいる一方で、その日に食べる物もなく飢えて死ぬ人もいる。もし、通貨の貯蓄額に上限を設けるならば、多くの尊い人命が救われることだろう。

## 利子を取ることを禁じる

お金を借りると利子をつけて返さないといけない。貧しい者は利子の分だけ余分に働かなければならず、富める者は全く働かなくても、利子だけで生活ができる。

もしも、通貨が劣化するなら、利子という制度もなくなるだろう。そのことを次の話から考えていただきたい。

無人島にあなたが漂着したとする。あなたは魚や木の実を取って飢えをしのぎながらも、安定した生活を求めて、荒れた地を開墾し、田に水を引き、苦勞して耕作して収穫を得るまでになった。天候に恵まれ、2年分に相当する充分な米が収穫できた。そんな時に、別の男があなたの島に漂着した。

その男はあなたにこう申し出る。「私は今から田を耕しても、来年まで食べる物が無いので、来年までの分の米を貸してください」と。

あなたは米を貸す代わりに利子を取ろうとするだろう。しかし、後から来た男はそれを拒否する。借りたのと同じ量の米しか返したくないというのだ。実際に、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教などでも利子を取ることを禁止している。(他の民族からは取ってもいいなど、実際は厳格に守られてはいない。)

利子をもらえないなら、米を貸したくはない。この収穫を得るまでに、血のにじむような苦勞をしたのに、この男は何の苦勞もなく、それを得ようというのだ。それなのに、利子も払わないというのはあまりにずうずうし過ぎる。

しかし、彼はこう説得するのだ。

「この米は1年経ったら劣化する。1年で食べきれない分を私に貸して、1年後に同量の新鮮な米を返してもらった方が得になるのではないかと」。

確かに、米は1年で劣化するし、保管場所も必要だし、ネズミに食われないようにしたり、通気の良い所に保管しなければならないなど、米をできるだけ良い状態で保つにはコストや労力を必要とする。それならいっそのこと今それを欲している人に与えて、新しい同量の米を1年後に返してもらった方がはるかに得になる。

このように、お金も劣化することによって、プラスの利子を取ることを制限できる。利子というシステムがお金にお金を生ませることを可能にしている。大きな富を持つ者は、汗水たらして働かなくても、お金を右から左へ動かすことでお金を生み出すことができる。上記の米の例のように、通貨を時とともに減価させ、プラスの利子を取ることを禁止したらどうなるだろうか。

利子の存在する私たちの社会では、10億円を持つ人がそのお金を銀行に預け、1%の利子を受け取るなら、彼は全く働かなくても毎年1000万円を手にするようになる。彼は全く社会に貢献しなくても、十分に生活できるだけの収入を得ることになる。全く働かず、つまり全く社会に貢献することなく、衣食住や様々なサービスを社会から受け取ることができる。

しかし、通貨が減価するシステムを導入し、プラスの利子を禁止すると、10億円はどんどん減って行ってしまふ。その10億円をどんなに運用しても、それを減らさず10億円のままだに保つことが精一杯である。当然彼が生活するためには、お金が必要で、その生活費を10億円から使っていくと、どんどん元の10億円は減っていく。つまり、彼はお金を運用するだけでは生活することはできないということになり、何らかの形で社会に貢献し、収入を得る必要に迫られることになる。

## お金の分配と必要労働力の分配(仮)

人類がお金という道具を導入した背景には、仕事をできるだけ平等に負担しあおうという意図があったのだろう。お金は自分が獲った獣の肉を他の人が収穫した果物と交換したり、他の人が持つ技能やサービスと交換するのをスムーズにしてくれる。お金がない状態と比べると、ある状態の方が互いに納得し合える取引になり、互いが満足することが多くなる。

同様のことを家族で考えてみる。世界レベルで考える前に、家族レベルで考えた方が理解しやすいと思われるからだ。

家族というユニットを運営するためには分業が必要である。食糧を確保する役割、衣服を作ったり入手してくる役割、住居を建てたり修繕したりする役割、料理をする役割、掃除をする役割、洗濯をする役割、食事の後片付けをする役割、風呂掃除をする役割、子育てをする役割、高齢者の介護をする役割、将来に備えて勉強をする役割、レジャーの計画を立てる役割など様々な役割がある。

それらの役割を家族が平等に担うなら、家族は等しく幸福を享受することになる。しかし、誰かが全くその役割を担うことなく、自分が受けるサービスだけを主張し、それを受け取るとするならば、他の家族の仕事が増えることになる。

たとえば、父親が家を建てたとする。そして、「お前たち、この家に住ませてやるから、家賃を納めろ」と家賃を取りはじめたらどうなるだろうか？ その父親はそこから得た家賃で、全く家族の役割分担を果たさないにもかかわらず、他の家族よりも裕福な生活を始めるだろう。それとともに、他の家族は一人当たりの役割分担が増え、生活が苦しくなるだろう。

## 不労所得者は社会の害悪

それを世界に置き換えて考えてみて欲しい。本来、世界中の人々全員が必要とする食糧、衣服、住居、その他様々なサービスの総合計を考えてみよう。それを均等に1人あたりに配分するなら、私たちの労働時間はもっともっと少なくなるはずである。ひとりあたりの平均の労働量は、全世界が必要とする労働量÷全人類の労働人口で計算できる。

しかし上記の父親の例のように、何らかの特権を得て、所属するコミュニティに対して、何の貢献もしないにも関わらず、他の構成員よりもより多くの富を得る人が増えれば増えるほど、他の人にしわ寄せがくる。

アメリカの証券会社の幹部たちは、我々一般庶民の想像もつかない程の富を得ている。その富は大きなお金を右から左に動かすことで生み出した富で、お金が減価しないという性質を利用して、実際には社会に対して何も貢献せずして得た富である。このように、社会に対して具体的な貢献をしていない人が莫大な富を得る、即ち莫大な財やサービスを手にすることによって、物を生産するしたり、サービスを提供することによって、お金を稼いでいる一般庶民の仕事が増えるとともに、一人当たりの取り分も減ることになる。

金利で暮らす者、家賃収入で暮らす者、具体的に社会に貢献しなくても地位や役職だけで莫大な収入を得る者、天下り官僚、名誉職で高額な給与を貰っている者など、社会に対しての貢献度が低いにも関わらず、莫大な収入を得ている人は全て、他の人にその負担分を与えるので、厳しい言葉だが、経済的な視点から見れば社会の害悪ということになる。

## 社会に大きく貢献する職業とほとんど貢献しない職業 ～無駄の多い競争～

「職業に貴賤はない」というが、社会に対して貢献度の高い職業もあれば、貢献度の低い職業もある。

社会貢献度の低い職業として、不労所得者の例を挙げたが、他にもまだまだある。だが、それを挙げる前に、社会に対して貢献度が高い職業の例を挙げてみよう。

農業や工業は必要不可欠である。無人島でお金がいくらあっても生きていけないが、米や野菜があれば生きていける。工業製品も私たちの暮らしを豊かにしてくれる。サービス業も必要だ。料理人、介護士、医者、看護師、保育士など、生活に不可欠だ。警察官、消防職員、自衛隊員なども必要だ。ファーストフードで働く人、コンビニの店員も必要だ。また、様々な技能を持つ人、プログラマー、パソコン整備士、鍼灸師など、何れも社会に必要不可欠な人材であり、職業である。

逆に社会に対する貢献度の低い職業とは何だろうか？ 例えば、競合する会社の顧客の奪い合いなどは貢献度の低い職業の典型である。

携帯電話、自動車、保険などのセールスパーソンについて考えてみる。携帯電話がない状態は不便な状態だと言えるが、その携帯電話がA社のものだろうが、B社のものだろうが、C社のものだろうがそれほど大きな違いはない。自動車選び、保険選びなども同様であろう。A社のセールスパーソンがB社の製品を使っている人に対してセールスを成功させ、A社に乗り換えさせたとする。このセールスにより、A社には利益になるが、B社にとっては損になる。顧客にとってはA社でも、B社でも大差ないかもしれないが、それを乗り換えさせるために、莫大な宣伝費や人件費をかけ合い、それは結局ユーザーが支払う金額に反映される。

現実的ではないだろうが、頭の中でシミュレーションしてみよう。A社もB社も必要最小限の製品の告知をすることで、それ以上、過剰な宣伝費をかけず、セールスパーソンを働かせなかった場合、つまり与えられた情報を基にしたユーザーの選択に任せただけの場合、A社の製品のシェアが6割で、B社のそれが4割になるとする。

資本主義経済社会では、A社もB社も自社の商品を他社の商品よりも多く販売するために、テレビの電波を使って盛んにCMを流したり、チラシを配るために大量の紙を消したり、車で各地に飛び回ったり、家庭サービスを犠牲にして夜遅くまで働いたりする。

その結果、A社のシェアが6割で、B社のそれが4割になったとする。そうした場合、上記の苦労は全て無駄だったということになる。公共が電波を新しく、消費者に有益な情報を流すことも無く、もう分かりきった広告を聞かされる消費者。チラシを作るための紙やインクの大量消費。車は二酸化炭素を撒き散らす。そして、家族の団欒は犠牲になる。

A社の営業努力や営業戦略の成功などで、A社のシェアが増えたとしても、逆にB社のシェアが増えたとしても、消費者は似たような商品をA社から買うのか、B社から買うのかの違いで大差はない。差があったとしても、その差は上記の莫大な人件費と地球資源と引き換えるにはあまりにもったいない。これに関わる費用、つまりセールスパーソンの人件費、広告宣伝費などは全て消費者が支払うコス



トとなって跳ね返ってきている。

多くの人の反感を買うのを覚悟で言うなら、上記のセールスパースンなどは社会に対しての貢献度は低いと言わざるを得ない。A社のセールスパースンが努力しなかった場合、その人の給料が減るといった個人的なことは別として、社会には何らマイナスとなっていないからだ。社会全体としては、携帯電話を必要とする人が良い携帯電話の製品を使えばいいだけのことだからだ。

他方、農家の人、工場で製品を作っている人、ファーストフード店で働く人、医者、教師、介護士、技術職、町のパン屋さんなどは社会に対しての貢献度が高い職業だと言える。

世の中の多くのセールスパースンを敵に回してもよくないので、フォローをしておく、彼らはお金を循環させるという役割において、大きく社会に貢献している。しかし、私が述べる経済システムでは、そんなことをしなくてもお金が勝手に循環するシステムなので、必要度が低くなる職業だと言わざるを得ない。

## 失業率が高いことは問題ではない

失業率が高いことを皆問題にする。しかし、果たして本当に失業率が高いことは問題なのだろうか？

昔に比べて家庭内での仕事は随分減った。手で一枚一枚衣服を洗濯しなくても洗濯機が自動で洗濯してくれる。電子レンジもあれば、店に行けば惣菜も冷凍食品も売っている。薪(まき)をくべて風呂を沸かさなくても、蛇口をひねればお湯が出てくる。これは悪いことだろうか？ 合理化、機械化して家庭に必要な仕事の総量が減ることのどこが悪いのだろうか？ 社会全体でもそうである。社会全体が必要とする仕事量が減れば平均の労働時間が減少したり、仕事をしなくてもいい人が増えたりするのは当然のことだ。

「社会全体が必要とする労働だけの人々が分担し、それを享受しあうならば」という前提条件がしっかりしているならば、一人当たりの平均労働時間が減少したり、仕事をしない人が増えたりすることは、何ら問題ないということをご理解いただけたらどうか。失業者というとマイナス的なイメージだが、上記の「仕事をしない人」には学生や技能を身につけている途上にある人なども含まれ、生涯にわたって仕事をしない、社会に貢献しないという人のことを指しているのではない。

景気を回復するための手段として、ケインズ経済学ではこう言う。「公共事業で、建設業者に穴を掘らせて、また別の建設業者にそれを埋めさせればお金が循環し、景気が回復する」と。

実際にこの手法はある程度の効果があるのだが、あまりに無駄が多すぎる。通貨を循環させるためだけの工事なら、工事をしたことにして、建設業者にお金を渡し、建設業者は資材を仕入れる予定だった業者に代金を支払い、その業者も買い付けをする予定だった会社に代金を支払えばいいことになる。その方が他の国民も工事渋滞に巻き込まれることもなく、二酸化炭素の排出量も抑制される。

このような無駄な公共事業を乱発することで、失業率を下げることでしか景気を良くできないというのは、そもそも通貨自体が循環の仕組みを持たないために、強引に通貨を循環させる政策をせざるを得ないことに問題があることに政治家も経済学者も気づかなければならない。

ここで述べているように、通貨が減価し、所得の上限を設け、利子を取ることを禁止したなら、どんな経済政策を打つよりも通貨はめまぐるしく人々の間を循環し、国や地方公共団体の予算は潤沢になり、人々は過酷な労働から解放されることだろう。

論理的に考えるならば、失業率が10%あるならば、全ての人の労働時間を9割にすることができるはずだ。しかし、そうならないのは、働かないとお金が貰えないから、労働を確保しておきたい人が他の人に自分が確保した労働を手渡したくないからである。手にした労働を分け与え、無駄な労働をしない社会が実現できれば、人々は誰もがゆとりのある豊かな人生を送るようになるはずだ。そして、そのシステムは現行の資本主義経済社会では実現が困難だということは誰もが知るところである。

## 第二章 新しい経済システムで社会はこうなる(かも)

### 国家が口座を管理する

通貨が減価し、所得に上限を設けるという新しい通貨システムを構築するためには、個人が持つ口座が複数あるとやっかいだ。口座が複数あったとしても、住民票コードもしくは国民番号といったもので管理もしくは検索可能とし、個人の所得の総額などが簡単に把握できるようにしておく必要がある。現実的には電子マネーのような形態が良いだろう。生体認証で個人を認証し、国民1人に対して1つの口座とし、全取引をコンピュータ上に保存しておけばよい。このように言うと、すぐプライバシーがどうのこうのという人がいるが、犯罪の可能性が疑われる場合など、司法が許可した場合に限定して、一部の必要最小限の人に開示するようにすれば問題がないと思われる。インターネットサービスプロバイダが通信のログを取っておくようなものだと考えれば良いだろう。

もちろん、複数の銀行口座があったとしても、各銀行口座の総残高が分かればいいのだが、そもそも新経済システムでは複数の銀行が存在する意味がない。自由経済社会では銀行が互いに競争することによって、よりよいサービスを生み出させようとするが、それには効果よりも副作用の方が多いということを私たちは認識しなければならない。私の知る限り、人体のシステムにはそのように、同じ働きをする器官や酵素などの物質が競争しているという例はない。

### 減価システムの導入方法

口座をそのような状態にすることにより、通貨を公平に減価させることが可能になる。減価のペースは月1~2%ぐらいで、適当な値を実情に即して決めるなどすれば良いだろう。(月1%の場合約6年で、月2%の場合約3年で元の額の半分となる。)

減価した通貨の一部は税金として国や地方公共団体に納められ、一部は所得の再配分として全国民に分配される。これにより、日本国憲法が保障する「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」(第25条)を十分に満たすセーフティネット(ベーシックインカム、最低限所得保障)が構築されるはずである。

日本の高齢者はセーフティネットが不十分だと感じているので、老後の安心を少しでも確保するために多額の貯蓄をしている。新しいシステムではお金が減価していくため、そういった貯蓄はできない。しかし、互いに困った人を助け合うシステムなので、不安は現在のシステムより遥かに少なくなるはずだ。実際に、民間の保険会社も実際に保険として支払われる額は、集めた額の2割程度ということらしい。あとの8割は人件費、宣伝費、会社の家賃、光熱費、株主への配当などに使われている。この社会保障を全て政府が担うならば、どれほど効率的で、無駄な仕事のない社会になるだろうか。

### 上限額の設定方法

口座情報をコンピュータで管理するなら、上限を設けるのも簡単だ。例えば、口座に貯蓄できる額の上限を500万円とするなら、それを超える額を税や所得再配分に充てれば良い。上限を超えて納めた分は社会に貢献した分なので、この人は今回100万円を税として納めたとか、累計では1000万円の税を支払うだけの社会貢献をしましたといった情報が分かるようにしておけば良いだろう。社会貢献度が高い人を表彰するなどのアイデアもあるだろう。

### このシステムでは人々が働かなくなり、社会が衰退するという心配はないのだろうか

「共産主義がうまくいかないのは働いても働かなくても給料が同じだからだ」という人がいる。新システムでは十分なセーフティネットが敷かれるために、全く働かなくても健康で文化的な生活を送ることができるため、共産主義社会と同じように人々が働かなくなり、その結果、社会が衰退することを懸念するかもしれない。しかし、以下の理由から私はそうならないと考える。

まず、人はそれほど怠惰な生き物ではないと私は考える。もちろん、怠惰になり働かない人もいるだろうが、そういう人が社会の中にある程度存在するぐらいではこのシステムは崩壊しないはずだ。

また、アリの社会でもよく働くアリは約2割で、その2割のアリが全体の仕事の約8割をしているという。パレートの法則だ。それが人間の社会にも当てはまるとするならば、熱心に働く人の方が少ないぐらいでも社会は回っていくということになる。実際に働くことに生きがい

を見出している人も少なくない。私も生活のために、収入を得るために働いているという側面以外に、仕事にやりがいを感じ、喜びを感じているから働いているという面も大きい。社会に貢献する、社会に貢献できるということは幸せなことなのだ。

ここまででも述べてきたが、新しい社会システムでは不要となる職業が多数存在する。現システムでは、お金を自分の属する側に持つてくるための無駄な競争、無駄な公共事業、各省庁の争いなど、あまりに無駄が多すぎる。無駄が多いということは無駄な仕事が多いということだ。社会全体が必要とする労働力の総和は本来はもっともっと少ないはずだ。

### 新しい社会システムで人々の暮らしはどのように変わるか ～貧富の差～

まず、貧富の差が少なくなるはずである。新しい社会システムは蓄財に上限を設けるからである。もちろん、新システムは貧富を全く無くすことは目的にしていない。共産主義とは違う。社会への貢献度が高い人ほど、社会に必要とされる人材である人ほど評価され、高い収入を得られ、豊かな生活ができるシステムでないと悪平等になるし、個人のモチベーションも上がらないだろう。

ではどれくらいの差が望ましいのだろうか？

こればかりは机上の計算ではなく、実際に新システムの運用を始めてみて、適切な数値を国で決めていくのが良いだろう。しかし、目安の数値を提示するならば、最高クラスの高額所得者で、一般庶民の10倍程度の所得が適切であろうと思う。全く働かない人がセーフティネットのシステムで得られる収入を一般庶民の平均所得の半額ぐらいだとすると、貧富の差の最大値は20倍程度という計算になる。この数値は現行のシステムから比べると遥かに少なく、その尺度から見ると、貧富の差はもはやないと言っても過言でないほどである。そもそも貧富の差が問題なのではなく、最低クラスの収入の人が生活できないということが問題なのだから。

その10倍の根拠は人体の細胞から計算したものである。脳の細胞は身体を支える一般の細胞の10倍ほどの酸素や養分を要求するという医学的知識からである。

### 新しい社会システムで人々の暮らしはどのように変わるか ～欲望～

人の欲望は限りがないと言われる。それはある面当たっているが、ある面外れている。人間の欲望にはボディの欲とマインドの欲がある。ここで言うボディの欲というのは、食欲、性欲、睡眠欲のような生命を維持するのに必要な欲を指す。ボディの欲には上限がある。腹がいっぱいになればもうこれ以上食べたいとは思わない。性欲、睡眠欲も同様で、上限があり、蓄えることが困難なタイプの欲望である。他方、マインドの欲というのは、もっとお金が欲しい、もっとブランド品が欲しい、もっと美しくなりたい、もっと優秀でありたいといった、生命活動とは直結しないタイプの欲望である。このマインドの欲には上限がなく、満たしても満たしてももっと渴望するタイプの欲望である。もちろん、マインドの欲には向上心なども含まれるので、それが悪だというつもりはないが、その欲望に振り回されると逆に人を不幸にしてしまうタイプの欲望でもある。

貯蓄に上限を設け、さらにそれが減価する仕組みを導入することによって、お金を儲けること、お金をもっと儲けたいという欲望をマインドの欲のステージからボディの欲のステージに移すことができる。

世界には今日の食糧もなく飢えに直面している人、ミルクがなくお腹だけ膨れて痩せ細っている子供も少なくない。他方、日本では多くの食糧が廃棄され、一人で高級車を何台も所有する人やブランドバックや靴や帽子を何個も持っている人もいる。彼らが高級車を1台我慢し、ブランド品を1個我慢して、ユニセフにでも寄付をするならば、いったい何人の子供の命が救われることだろう。

そう考えるならば彼らはある意味殺人者である。庶民である私たちも見殺しにする人数が少ないだけで潜在的殺人者と言えるかもしれない。新システムは私たちのような潜在的な殺人者を救うシステムでもある。

話は変わるが、私は幼い頃、友達の影響で牛乳瓶の蓋を集めていた。小学校で給食の牛乳瓶の蓋を集めることが流行っていたからだ。成長と共に誰もがそんな馬鹿馬鹿しいことは卒業していくのだが、使いもしないブランド品を数多く集める女性などはまだそういった幼児性が抜けられないのかもしれない。自分はそれを自慢しているつもりでも、心が成熟した人から見れば、非常に愚かしい行為であり、厳しい言い方をすれば殺人的行為だということになる。

世界の貧困の問題を解決するのに、人類の魂の向上を待つてはられない。通貨に減価、上限という仕組みを組み込むことにより、金儲けの欲をボディの欲レベルにすることができると考える。

## 新しい社会システムで人々の暮らしはどのように変わるか ～取引～

お金が絶大な力を持つがゆえに、人はお金にひれ伏す。人間のために奉仕すべき単なる道具でしかない「お金」に。

部下が上司に従うのも、飲み屋のママがあなたに微笑むのも、セールスパーソンがあなたに微笑みかけるのも、あなたに対してではなく、あなたの持っているお金に対してであるかも知れない。それが本当かどうか確かめるのは簡単だ。一文無しになってみればいい。

現行のシステムではお金が絶対的な価値を持ち、万物の頂点に君臨するために、人はお金にひれ伏す。お客様は神様だというのが、本当はお客様が神様なのではなく、お客様が持っているお金が神様なのである。しかし、新システムではお金に減価というハンディキャップを負わせることにより、自然に朽ちて消滅する万物と同等の位置にまで、お金の地位を引きずり降ろすことができる。

現行のシステムでは客に対して、商品やサービスを提供する側が下位になる。しかし、店側がどのような商品やサービスを提供するか決定権があるために、消費者に対して強い立場であるとも言える。

消費者は、求める商品やサービスが支払う金額と交換するだけの価値があると判断して、その商品なりサービスを購入する。ならば、お金を支払う方が偉くて、支払われる側がペコペコしないといけないというのはおかしい。対等な交換ならば、互いに、「お金をお支払いいただきありがとうございます」、「商品を提供してくれてありがとうございます」というのが本当だ。新システムでは本来のこういった互いに感謝しあう取引に近づくような気がする。

## 新システムで証券会社、証券市場はどうなるか

お金に絶対的な価値を与えず、お金を運用してお金を増やすという行為を禁じているのだから、証券市場はなくなるだろう。我々が豊かに生きるのに必要なのはお金ではなく、お金と交換される財(商品)やサービスである。お金がいくら循環しても具体的な財やサービスを生み出すわけではない。人々が協力分担して、社会に必要な財やサービスを生み出し、それらを公平に分け合うのが社会の理想的な姿であるはずだ。しかし、証券市場で動くお金は私たちが毎日の生活で使うお金、つまり生活に不可欠な財やサービスと交換される生きたお金の何十倍にもなった。金融資本主義は巨大なカジノと化していて、そのカジノの運営の失敗により、それらに全く無関係な大多数の人々を不幸な状態にしてしまった。

資本主義社会で、勝ち組と言われているのはどのような人たちだろうか？

お金を右から左に動かすことによって利益を得ている人。本来、現在地球上に住む人々だけでなく、未来に生まれ来る人々も含めた全人類共通のものである石油などの資源を自分が所有する土地から取れるという些細な理由だけで独占している人。特権階級と呼ばれるような、何らかの権益を持つ人など。

財やサービスなどの価値を生み出さない人が、それらを生み出す人の何千人分もの富を奪うために、実際に財やサービスを生み出しながら、真面目に、社会貢献的に生活している人が搾取されるのである。彼らは経済的な観点からいうならば、まさしく寄生虫であり、害悪であり、(経済的な視点からは)存在しない方がよい。

新しいシステムでは証券市場は必要ないのである。

## 新システムで銀行はどうなるか

通貨が勝手に循環するし、利子を取ることを禁止するのだから銀行は必要ないだろう。銀行の果たす社会的役割は何だろう？ 全国銀行協会のサイトのトップページによると、資金の融通(金融)をするという社会的役割があるという。またその他に、「お金を預かる」、「お金を貸し出す」、「送金したり決済したりする」という3つの機能を挙げている。

それらの仕事は新システムでどうなるだろうか？ 新システムではお金は全て電子マネー化され、数字としての実態しか持たず、お金の流れもログ(記録)として残るので、詐欺や盗難の心配はほとんどなくなるだろう。従って、いちいち銀行に預ける必要はなくなる。

同様に、送金したり、決済したりするのも銀行は必要なくなる。ネットにさえつながる環境があれば、簡単に送金できるようなシステムは構築可能なはずだし、ネットにつながらない環境であってもお互いに書類を取り交わすなりしておき、ネットにつながる状態になった

時に決済をするということで問題ないはずだ。

最後のお金を貸し出すという銀行の機能だがこれは眉唾ものだ。しばしば銀行は、「雨の日に傘を取り上げ、晴れの日に傘を貸す」と悪く言われる。銀行も企業であり、利潤を追求する主体であるから、お金を確実に返してくれる会社にお金を貸したが、お金を貸すのにリスクがありそうな会社にはお金を貸さないということになる。確実に利益になる消費者金融には多額の融資をし、社会に貢献している町工場の運営に必要な運転資金は貸さないという、反社会貢献的なことがしばしば起こるのである。

新金融システムでは社会に必要な企業は無利子で応援するようになるだろう。銀行に代わる公的機関が、この企業は社会的に必要だと判断すれば、資金を融資するし、必要ないと判断すれば資金を融資しないように判断すればいい。その判断基準は銀行のそれとは違い、儲かるか儲からないかという基準ではなく、社会的にプラスとなるかそうでないかが判断基準となる。

現行システムでは、資金を金融により調達するために、利子をつけて返さなければならず、いくら社会的には有意義な商品やサービスを提供できるとしても、利子の部分も上乗せしても十分に利益が出る見込みがないならば、資金提供が得られないのである。

新システムでは銀行は一旦解体され、そのノウハウを生かして、新規に事業を起こそうとする人たちに対して、融資を行ったり、経営アドバイスを行ったりする機関となると良いだろう。社会的に有意義な事業に関しては、税金を投入して、その事業を支援することが必要だろう。現行のシステムでそれを行うと、利権が生じたり、無駄が生じたりで破綻するリスクが高いが、新システムでは人間の欲望をコントロールされるし、人間本来の社会に貢献することに喜びを見出しやすい環境となるので、より適切に目的が達成されると予想される。

また、銀行は中小企業などに運転資金を提供するという役割も担っているが、中小企業にとって、運転資金の融資はありがたいものの、利子を上乗せして返済しなければならぬために、苦勞も絶えない。

新システムでは利子を上乗せして支払う必要がないため返済が非常に楽になる。それだけではなく、セーフティネットがしっかりしているので、会社が赤字さえ出さなければ、従業員の生活が困難になることがない。現行システムではその会社がいかに社会にとって有益なものであっても、元金に利子を上乗せした額を銀行へ返済し、従業員の生活を保障するだけの給料を支払うだけの利潤を上げなければその会社は立ち行かない。そのため、サービス残業の問題や経営難による自殺の問題などが生じるのだ。

## 新システムで株式市場はどうか

資本主義社会では、会社は株主のものである。会社の存在目的は株主の利益を最大化することである。会社は株主のものであるから、株主がその会社をどうしようと勝手である。事実はこうだが、大多数の人が心情的にもこれには納得できないはずだ。ここにも資本主義社会の自己矛盾の一端がうかがわれる。

株式というシステムもお金がお金を生むシステムであり、具体的な財もサービスも生産しない者がそれらを生産する者よりも多くを得ることを可能にする有害なシステムである。

新システムに株式市場は存在しない。起業したい人が創りたい会社のプランをしかるべき機関に申請し、それが社会に有益だと判断されれば、資金が提供される。その財源は税金だ。現システムで起業したい人の中には、会社を大きくして、大金持ちになりたい、社会的なステータスを手に入れたいという欲望を持つ人も少なくない。その対価として、起業者は大きなリスクを負う。大金持ちになるか、莫大な借金を背負うかの何れかの結果が待っているということも少なくない。

新システムでは、起業者は大儲けをすることもなければ、借金まみれで生活が困難になることもない。このことは責任感が希薄になる可能性があるという側面もあるが、総合的に判断すればこちらの方が好ましいように思う。所得の上限があるので、極めて優秀な起業家であっても一定額の所得しか得ることができないが、社会に対して多大な貢献をした業績や納めた税金の額は記録に残る。ノーベル賞の賞金なし版といったようなものかもしれない。名誉なことであり、起業家にとってはそのワクワク感だけでその仕事に打ち込むだけの価値はあるはずだ。

とにかく、数字が飛び交う株式市場が、実体経済の首を絞めるということはなく、強欲な資本家たちも姿を消すのである。

## 新システムで企業はどうか

新システム社会での企業は株主のものではなく、利潤の追求が第一目的ではない。社会貢献が第一目的となる。しかし、利潤を追求するのも目的のひとつであることに変わりはない。会社が利益をあげれば、社員がより豊かになるため、社員は熱心に働くだろう。しかし、収入の上限があるために、利益至上主義にはなりにくく、自分の志のために働く人が増え、正直な会社が増えるだろう。

企業間の無駄な競争も減り、より効率的になるだろう。その結果、労働時間も減り、人々に豊かな人生をもたらすだろう。

肝臓は人体の解毒の働きを一手に担い、腎臓は血液の浄化を担い、尿を作る。そこに無駄な競争はない。

前章でも述べたように、競争には大きな無駄がつきまとう。ある人は競争により、より良い商品やサービスが生まれるという。確かにそういう面はあるだろう。しかし、その対価が大きすぎる。行政が二重行政をすると無駄だということは明らかだ。例えば、大阪府と大阪市の両方で水道局を持ってやっていることが無駄だと指摘され、統合され、改善された。

企業は互いに協力し合うところは協力し合い、競うべきところは競うようになる。

企業も社会の変化と共に変わっていかなければならない。ワープロも時代と共に使われなくなり、ポケベルも使われなくなった。それと共にメーカーは製造する部品をシフトしてきた。万物は全て生々流転するのだから、会社もその時代の役目を終えたなら、徐々に規模を縮小し、やがては消滅していくのが道理というものだ。しかし、現システムでは職を失うということは路頭に迷うことに直結するために、社員は職にしがみつき、会社にしがみつこうとする。

建設業者もこんな道路は必要ないと薄々感じながらも、それをしなければ職を失い、収入を失うために、それにしがみつこうとする。職を失っても全く困らないだけのセーフティネットが保障されるならばそれにしがみつこうする必要はない。建設業者は必要なときにその技能を社会貢献のために提供すればいいし、仕事がなく暇な時はゆっくり休むなり、ボランティアをするなり、他の業種の手伝いをすればいいのである。

身体のおかしさもそうになっている。アルコールを飲んだ後、肝臓には通常より多くの血液が送られ、アルコールを分解する。しかし、アルコールの分解が終われば、血流量は通常に戻る。しかし、ゼロにはならない。ゼロにして肝臓が死滅してしまうとまた必要な時に身体全体が困るからだ。

新システムでも、同様にすれば何ら問題ない。仕事がなくても普通に生活できるだけの収入は保障され、仕事がある時にはさらに給料が上乘せされるという仕組みが構築されるならば、社会全体にとって有益である。消防も自衛隊も必要な時に備えて準備しておけば収入が保障されているのだ。

## 税はどのように徴収されるか ～税務署の役割～

通貨の減価分や上限から溢れた分がみんなの税金に充てられることは説明済みだが、このシステムだと税を徴収する税務署の仕事はなくなってしまう。新システム下で大規模な脱税は無理だろう。しかし、現行システムでもおいしい職もあれば、割りの悪い職もあるように、濡れ手で粟を狙う人もいるだろう。そういう人が多くなれば多くなるほど、新システムでもよりよい社会は実現しないだろう。

現行のシステムの場合、できるだけ公平に税を負担しあうために、帳簿をつけ、売上げや経費を申告する。この帳簿をつけるという行為はそれだけのためであり、商品やサービスを生み出すものではない。しかし、その帳簿をつけ、税金を申告し、税金を徴収するのに多大な労力が必要になる。数人の会社でも経理の人を1人雇わなければならないほどの労力を使って、税金を徴収している。

しかし、考えてみればこれで不公平が是正されるかというところではない。同じ業種間で比べれば、売上げ総額や経費を細かく計算して申告することが公平に繋がるのだが、そもそも業種間でものすごい不公平が歴然として存在するのに、そのようなことをしてもほとんど意味がないことになぜ気づかないのだろうか？ つまり、濡れ手で粟の業種からはたつぷりと税金を取り、コソコソと地道に稼ぐ業種からは少しだけ税金を取るようになるのが本当の公平というものではないだろうか？

話が少しそれるが、ワーキングプアの問題や非正規労働の問題が深刻な局面を迎えている。その時にどの政治家も評論家もコメントーターも「同一労働同一賃金」が実現されていないことを問題視する。もちろん、それは問題だ。だがそれ以上に、業種間の格差がありすぎる方が問題なのだと誰も指摘しない。

コツコツと1個 80 円のコロツケを売って生計を立てている人と、富裕層をターゲットに1個数百万円の宝石を売っている人との格差。昼夜分かたず医療現場で働く看護師と、依頼者の懐具合を見て薦める祭壇の価格を変える葬儀屋との格差。子供の笑顔と成長のために日々努力している保育士や教師と、天下りをして、新聞を読み、職場に行くのが日課のようにしている天下り官僚との格差。枚挙に暇がないとはこのことだ。

同一賃金同一労働で問題にされる格差もちろん問題だが、それはせいぜい2倍程度の差であろう。しかし、先ほど挙げたように、職業による賃金の格差はそれを遥かに凌ぐ格差があるのだ。

全く公平な給料というのはあり得ない話だが、仮にそういった理想形が存在するとするならば、どのような給料体系になるだろうか？理想的な給与体系があるとすれば、その人の社会貢献の度合いに比例した給料になれば文句がないだろう。共産主義では労働時間が商品の価値を決めたが、新システム的な考え方では、もし神様があなたの働きに対して給料を支払うとしたら、あなたはどれくらいが受け取れるかという基準で判断する。もちろん、判断は人間がするのだが、判断基準はそのような視点にするのが公平と言えるだろう。

そうしてみると、天下り官僚などは給料はほぼゼロか、もしかしたらマイナスである。その何倍もの給料を、ファーストフードで働いているフリーアルバイトたちが得てよいことになる。

そう考えると、税務署の仕事がより公平に国民から税を徴収することだとすると、現在やっているような、日々の収支を記録した帳簿のチェックなどよりも、その人が日々どのような仕事(社会貢献)をしているかを申告させたり、周囲の人に聞いてみて、どの程度の税を取るかと、どの程度の所得の再配分をするかなどを決めた方がよほど公平な社会になる。新システムでは税務署はそのような役を担ってもらいたい。もしそうなれば、証券会社の幹部たちに桁外れな給料を支払うということもなくなるのだ。

あなたは今、適切な給料をもらっているだろうか？ 来月から神様があなたに給料を支払うとするならば、あなたの給料は上がるだろうか、下がるだろうか？

### 新しい経済システムは環境に優しいシステムなのか

ここまでの論を丁寧に読んだ人は、新システムは環境にも優しいということは容易に想像できることだろう。だが、ここではもう少し丁寧に見てみよう。

企業は無駄な競争、顧客の奪い合いをすることがなくなるので、移動のコストや人件費が少なくなったり、それに伴うガソリンの消費量や二酸化炭素の排出量も減ることになる。

たとえば、全国を網羅する宅配業者も数社あるが、それらが互いに協力したり、地域により分担するようにすれば、効率的になり、環境にも優しく、日本国民がこの豊かな生活をするのに必要な労働力の総和は減ることになり、暮らしにゆとりが生まれるだろう。

コンビニなどでも商品が足りず売れるべきはずの弁当やおにぎりがない状態の方よりも、後で商品を廃棄する羽目になるとしても、過剰に仕入れて、廃棄する方が利益になるという環境に優しい無駄も減るだろう。

### 新しい経済システムは効率的なシステムなのか

セーフティネットが満足度の高いものになるために、犯罪も減り、警官の数も少なくてすむようになるだろう。

消費することによってお金が循環するというシステムではないので、アメリカのように、10年に1度程度の頻度で戦争をして武器を消費しないと全米で数百万人の軍需産業従事者の生活が守られず、大量の失業者を生んでしまうという愚かな状態にも陥らない。

また、所有欲や高価な商品を持つことによる自己顕示欲も減り、マイカーや日常品のシェアリング(共有)も広まり、効率の良い社会に近づくことだろう。

### 私たちの生活はどうか変わるか

社会が効率的になり、労働時間が大幅に減るだろう。現行システムにおいては労働時間の減少は必ずしも歓迎されるものではない

が、人体をモデルにした新システムでは労働時間が減少することは歓迎されるべきことだ。人々の暮らしにゆとりが生まれる。

口座を一元管理するので、犯罪も激減するだろう。全ての取引のログが残り、必要に応じて、警察などの公権力がその情報にアクセスできるしくみになっているため、振り込め詐欺のような問題もなくなる。

借金に利子がつかないのは歓迎だが、庶民のささやかな楽しみや預金の利子もなくなるのは残念だという人もいるだろう。しかし、よく考えてもらいたい。あなたは現行の利子というしくみの中で、得をしている側だろうか、それとも損をしている側だろうか？

「私はたいした貯金はないが、借金をしたこともないから、損はしていない。微々たる利子だとしてもついているから、どちらかという得をしている側だろう」と考える人もいるかもしれない。

しかし、よく考えてもらいたい。あなたは消費者として、様々な製品を消費しながら生活している。その製品を作る工場は銀行から借金をして、それを資金として製品を作っている。当然、その製品には工場の利益を含むがそれだけではなく、銀行への返済分の利子も上乗せされているはずだ。あなたが消費する全ての製品に、借入先への利子が上乗せされ、莫大な広告費が上乗せされているのである。

そう考えれば、利子というシステムによって、利益を得ている人はごくごく一部で、大多数の人は製品上乗せされた利子を支払う側であることが分かるだろう。結果的には利子など、お金を回すことで莫大な利益を得ている人が消費する商品やサービスの分を庶民が負担しているのだから。

テレビをつければ何度も何度も同じCMが繰り返し流される。見たことのない新しいCMかと思ったら、今まで見慣れた商品の新しいCMだったということもしばしばで、結局、広告宣伝費が高いので資金が潤沢な大企業しかCMを打てないのである。テレビ局（民放）も利益を追求する民間企業であるから、CM料を負担してくれる企業のCMを流すのは当然である。

しかし、放送局も社会貢献を第一に考えると、テレビCMの内容も大きく変わるだろう。もっともっと私たちに有益な情報が発信されるはずだ。

## 政府はどのようになるだろうか

資本主義も初期の頃は、市場経済に任せておけばだいたいうまくいくと考えられていたが、実際はそうではなく、貧富の差が拡大したり、雇用形態の問題があったりなどで、国家が介入しなければならないことは否定できない。

新しいシステムではどうか？ 人体のシステムを手本とすると、各臓器が勝手に動いているのではなく、脳が指令を出して、生命活動を維持していることが分かる。脳からの指令はこと細かいところまでの指令ではなく、交感神経や副交感神経を見ても分かるように、促進命令であったり、抑制命令であったりのおおまかな指示で、あとはその指示に従って働く各臓器に任されている。

（加筆予定中）



## 第三章 どのように新しい経済システムを導入するか

### トップダウンではなく、ワーキングプア層から改革が始まる

共産主義革命は多くの血を対価として成し遂げられたが、それは人を幸せにするイデオロギーではなかった。この新しいイデオロギーが社会に導入されていくとしたら、どのような手段で、どのような経過をたどって導入されるのだろうか？

共産主義革命のように、血を対価としてはならない。幸い我々は民主主義国家に住んでいるので、その必要もない。

新しいイデオロギーを掲げる政党を立ち上げ、政治を通して改革をしていくという手段もあるだろうが、残念ながら私にはそれだけの資金もないし、この新システムを広く国民に理解してもらうのは困難であろう。別の方法を模索するしかなさそう。

新システムに移行するのを最も望んでいるのはどのような人たちだろうか？ 現代の資本主義の下で不利益を被っている人、搾取されている人たちであろう。

現在の通貨システムで得をしている人はどんな人だろうか？

お金をたくさん持っている人たち(富裕層)である。そうした人は新しいシステムに移行することに反対するだろう。

また、中流階級の人はどうだろうか？ 多くの人は保守的なので、かなり困った状態にならないと、積極的に新システムに移行しようとはしないだろう。

そうしてみると、低所得者層、非正規労働者、ワーキングプアと呼ばれる人たちがターゲットとなるだろう。彼らは現代の格差社会は間違っていると気づき、金融資本主義に未来がないことを知っている。彼らは資本主義とは違う社会システムがあるとしたら、一か八か受け入れてみたいと考えているからだ。彼らに失うものはない。彼らから革命は始まるのだ。

### 新しい循環システムの構築を目指す

低所得者層に位置する人々はお金がないから生活が苦しいのだが、彼らは何も持っていないわけではない。ある人は農作物を生産しているし、ある人は技能を持っている。またある人は勤勉に働くという素晴らしい才能を持っている。

逆転の発想で考えてみよう。世界中の富裕層だけを鎖国状態の国に集めてみよう。彼らだけ、別の惑星に移住したと考えてもいいだろう。

彼らはお金は持っているが、それ以外何も持っていない。誰も農作物を生産しないし、自分たちで家を建てることも、橋を架けることもできない。おいしい漬物をつけることもできなければ、肉体労働もしたがるまいだろう。彼らはお金を握り締めたまま、衣食住を満たす健康で文化的な生活どころか、最低限の生活でさえ成り立たない可能性がある。

では、逆に低所得者層と呼ばれる人たちだけで別の惑星に移住したとしたらどうだろうか？ 農業を営む者、家を建てる者、橋を架ける者、おいしい料理を作る者、社会に必要な技能を持つ者、汗を流すことを厭(いと)わない者など。社会は成り立ちそう。少なくとも富裕層のみの社会よりもずっとマシな社会がそこにはあるだろう。

つまり、お金などなくとも、それに替わる商品やサービスの交換手段があれば社会は成り立つということが分かるだろう。要は、私たちは現行の通貨とは違った、通貨の代替となる新しい交換手段を構築すればよいということだ。

その具体的な手法をこれから考えてみよう。

### 通貨に頼らない新しい交換システムを構築する

まず、新しい経済システムを理解し、支持する数名が集まり、事務局を立ち上げる。そして、その事務局はそのコミュニティ内だけで使える通貨を発行するのだ。通貨を発行するといっても、紙幣や商品券のようなものを発行するのではない。各会員が自分の所持金や負債を把握できればいいので、実態のある通貨や紙幣を発行する必要はなく、実態のない口座上の数字でいいのだ。もちろん、事務局に潤沢な資金などないので、数字の方が都合がよい。

取引はこのように行われる

まず、コミュニティ参加希望者には、システムをよく理解してもらい、会員登録してもらう必要がある。入会には免許証などの身分証明書の提示をもらう。

農業を営むAさんが入会した場合の例で取引の内容を見てみよう。

Aさんは自分がコミュニティに対して貢献できそうなことを書いて事務局に提出する。野菜の提供などが貢献できる事項に該当するだろう。その情報は事務局がまとめ、ネットで手軽に検索できるようにしておく。また、可能ならばインターネット環境にない人にも配慮し、紙媒体の情報誌のようなものも準備しておくといいたい。

野菜を欲しがらるBさんがネットや情報誌でAさんのことを知り、ネットを通じて、もしくは事務局を介してAさんにアクセスする。Aさんとの交渉で、必要な野菜を1000通貨で買うことにした場合、Aさんの口座には1000通貨が加算され、Bさんの口座からは1000通貨が減算される。

口座の残高には上限が設けられていて、一定額以上になると、超えた分は自動的に事務局への税金として、事務局の口座に加算される。また、月が替わると、最終日がプラスの残高であった場合、その2%が減価される。つまり、月末に10000通貨がある口座の残高は翌日になると9800通貨になるといった仕組みだ。他方、マイナスの残高には利子につかない。借りた分と同じだけ返せばよいのだ。返しても返しても元金が減らず、生活に困窮するということはこのシステムではあり得ない。

通貨が減るといって、価値が減らないうちに必要とする商品やサービスと交換しておこうという意識や、支払いなどは早めに済ませおこうという意識が生まれ、循環が促され、景気の良い状態になるのだ。

このコミュニティで使われる口座は私たちが日常使っている銀行口座とは性質が異なる点がいくつかあることに気づくだろう。まとめると以下の点が異なっている。

- 1) 減価システムが組み込まれている。
- 2) 借金が負えること。つまり、マイナスの残高がある。
- 3) 残高にも負債にも利子につかない。
- 4) お金を貯め込むためのものではなく、できるだけ公平に、社会からの受ける恩恵と社会に対する貢献のバランスをとるための目安となるもので、コミュニティ全体ではゼロサムとなり、プラスの残高の人とマイナスの残高の人がほぼ同数となるのが普通である。また、個人で見ると口座の残高がプラスの状態の時とマイナスの時がほぼ同じぐらいの期間あるのが普通である。

このコミュニティでは口座がお金の代わりになり、会員間で様々な商品やサービスが循環するようになる。取り扱う商品やサービスの種類が豊富になり、流通量が増えると便利なので、より多くの会員が集まってくる。取引が盛んになれば事務局の口座の残高も増えてくる。事務局もたまった分(プラスの残高)は積極的に生活に困窮している会員に寄付する。介護が必要な高齢者を抱えている会員や急な事故や病気で入院して収入がなくなった会員に与えたり、貸したりするのだ。

こういったコミュニティに富裕層は参加しない。彼らは気ままに新聞を読んだり、ゴルフをしているだけで、庶民の何倍ものお金を手にすることを当然だと考えている。特権階級意識を持っているのだ。しかし、このコミュニティには特権階級は存在しない。このコミュニティ内で一食分の食料を手に入れるには、一食分に相当する分の具体的な貢献をすることでしかそれを手に入れることはできない。このコミュニティではお金がお金を生むということはないからだ。

## 新しい通貨システム下での流通の様子

最初は、ワーキングプア層、低所得者層、非正規労働者など社会的弱者と呼ばれる人たちが集まって、おもちゃのお金で遊んでいると馬鹿にしたり、冷ややかな目で見ているマスコミや富裕層であったが、だんだん無視できないほどにそのコミュニティが大きくなってきた。

ネットでの広がりやマスコミ報道も手伝って、コミュニティの参加者はますます増えた。コミュニティが大きくなればなるほど、そのコミュニティ内でほとんど全てのことがまかなえるようになった。日本の法定通貨である円に頼らなくても、生活が充分成り立つということを人々は実感し始めた。

生産者、例えば農家を例にとってみよう。収穫した野菜は円で取引される通常のマーケットに流通させる選択肢もあれば、口座で

取引するマーケットに流す選択肢もある。口座でのマーケットは交換マーケットと呼ばれた。

意外なことに、交換マーケットが拡大するにつれ、農家は現金で販売するよりも、交換マーケットに農作物を優先的に流すようになってきた。お金の換えておけば1万円はいつまで経っても1万円なのに、なぜわざわざ劣化する交換マーケットの方に手塩にかけた農作物を流通させるのだろうか？

このシステムの趣旨に賛同するから、損と分かっているこのマーケットに流通させるだけではない。実際に得をするから交換マーケットを選ぶのだ。参加者の好意に期待することも大切だと思うが、システム設計は、ほとんどの参加者が打算で動いたとしても成り立つシステムでなければならないだろう。

考えてみて欲しい。農家が提供した1000円分の農作物が様々な人の手を経るうちに、2000円となってスーパーに並ぶ。もちろん、輸送費などが加算されるものもあるが、流通システムの中で儲けを得る人や小売店の株主への配当などの様々な費用が上乗せされるからだ。

しかし、交換マーケットでは流通の途中でかかる経費が少なくなることが予想されるので、農家が1000円で出荷する農作物を、交換マーケットでは1200通貨で出荷できるかもしれない。それに流通コストなどが加算されて、仮に1800通貨ぐらいになったとしても、交換マーケットの会員は市場で2000円で買うよりも、1800通貨で買った方が得だということになる。それに、交換マーケットで使われる通貨は減らないうちに早く使ってしまいたいから、財布の中に2000円と2000通貨があったら、先に2000通貨を優先して使うことになるだろう。ご理解いただけたでしょうか？

こうも言える。通貨での通常の取引では農家の人は2000円の価値のある農作物を提供して、その対価に1000円の現金を受け取る。その1000円の現金は他の商品と交換する。しかし、その1000円の商品の元の原価は500円分の価値でしかない。

つまり、農家の人は2000円の価値の農作物を500円の価値の商品と交換し、その500円の商品の作者も農作物を買うときにはその4倍の2000円を稼がなければならないのである。

計算を単純にするために、上記では2倍で計算したが、直接交換に比べて多くの無駄があることは理解いただけたことだろう。交換マーケットでは口座を通じて、直接取引に近い形での助け合いが促進されれば、人々は豊かになることが予想される。

### 新しい経済システムは資本主義を崩壊に導くのだろうか？

交換マーケットの参加者は着実に増えていくだろう。このシステムは多くの人の修正、改善によって、より素晴らしいシステムにバージョンアップしてくだろう。マスコミも取り上げ、その思想を紹介した本や論文、漫画が広まり、社会の共感を得て、ひとつの社会現象を巻き起こすだろう。

交換マーケットの動きが盛んになるにつれ、富裕層は新社会システムを恐れ始めた。

法定通貨である円で取引をしなくても、様々な商品やサービスが手に入るようになると、少しずつではあるが円の価値が低くなっていく。前にも述べたが、実際に人々の生活に密着したお金、つまり人々がパンを買ったり、医療サービスを受けたりする時に使われているお金はお金の総量の1~2%程度でしかなく、大部分のお金が金融市場で動いているのだ。

富裕層たちが恐れたのは通貨の相対的な価値が減ることだけではなかった。むしろ、その程度のことは無視できるほどの大きな問題が露呈してきた。

現行の通貨システムが自然の原理に基づいていないということを多くの人が感じ始め、現行の通貨はもはや必要ないのではないかといった声や、日本の通貨(円)にもこの減価システムを取り入れる工夫をするべきだという意見も出てきた。

こういった風潮になると、富裕層は通貨として富を持っておくことにためらいを覚え、不動産や美術品をはじめとして、できるだけ物に交換しておこうとする動きが出てきた。もし仮に富裕層の大部分がそのような動きを始めたとなると、交換マーケット以外の円で決済する市場で売られているもの全てが富裕層によって買い占められるだろう。しかし、全ての商品を買占めても、まだお金が余ってしまう。商品のなくなった市場で、いくら札束を積んで、売ってくれと言っても何も手に入らないことになる。つまり、お金がただの紙切れになってしまうということが現実に起こるのではないかと危惧(きぐ)された。もともと通貨というのは人々がそれに価値があると信用するから通貨の役割を果たすのであって、それが崩れた場合、紙幣もただの紙切れに過ぎないのだ。というか、ただの紙切れを紙幣と決めて取引をしていたのに過ぎなかったのだ。

そう考えると、現在の貨幣システムは巨大になりすぎて、自己崩壊を起こしているということが明らかになってきた。

政府はその崩壊を回避するために、国を挙げて資本主義とは違った新しい経済システムに移行するという大英断をくだすかもしれない。

サブプライムローン問題、証券会社役員の信じられない額の給料やボーナス、証券市場の数字が変化するだけで、实体经济が大打撃を受けるという信じられない状況などなど。もうあなたも薄々感じているのではないだろうか？ こんな経済システムは何かおかしい。何か根本的なところで間違っているのではないだろうか。

この経済革命も元をたどれば、経済的弱者同士の助け合いのために始まった交換マーケットから始まるのだ。権力を持つ者、莫大な富を持つ者が起こした革命ではない。その革命は無血で成し遂げられるだろう。

(もう少し続きを書く予定。)

## 第四章 補足事項やQ&Aなど

### 身体システムがモデルだとしたら、心臓の役割は銀行なのではないか？

全国銀行協会のサイト内に銀行の社会的役割について解説してあるページがある。以下のページがそれである。

<http://www.zenginkyo.or.jp/service/bank/part/index.html>

それに沿って、どこが私の主張と同じで、どこが違うかを解説していこう。

サイトの解説には「お金は経済社会の血液」とある。これには異論がないが、そうであるならば、お金も血液と同様に徐々に劣化し、消滅していくべきであるというのが私の主張であることは既にご理解いただいている通りである。

サイトではお金には「価値の保存機能」と「交換機能(決済機能)」があると解説している。

これにもほぼ異論がないが、もっと丁寧に説明しなければならないはずだ。というか、彼らはそれに気づいていないのだからと思う。お金の持つ保存機能と交換機能は背反する機能である。保存している時には交換をしていない訳だし、交換している時は保存していないのである。

お金は溜め込んでいるだけでは人を幸せにしない。様々な商品やサービスと交換され、人々の間を循環することによって人々を幸せにするのだ。交換機能を高めるためには、価値の保存機能を弱めなければならない。ここにも通貨が減価しなければならない理由が存在する。

「銀行は経済社会の中で、個人、企業、国や地方公共団体にお金という血液を送り込む心臓のような存在といえます。銀行は新鮮で清潔な血液をつねに送り続けていかねばならず、その責任は重大です」と、銀行が心臓であり、心臓が血液を循環させるように、銀行がお金を循環させていると説明している。

心臓が血液を循環させているというが果たして本当にそうだろうか？

「そんなことは小学生でも知っている！」「何を言っている！ そんなのは常識だ！」という声が聞こえるようだ。では、あなたは銀行がお金を流通させているということをそのまま信じられるのだろうか？ あなたの給料は会社から支払われ、受け取った給料の大部分は衣食住、光熱費、水道代、教育費などに使われる。余った分を銀行に預けるかもしれないが、その現実を見る限り、銀行がお金の循環に関与しているのは全体から言えば微々たるものである。それにも関わらず、さもお金のほとんどを銀行が流通させているというのは言い過ぎではないだろうか？

同様に、心臓が血液循環の役割を一手に担っていると考えるのは間違いではないかと常識を疑ってみよう。結論から言うと、血液循環の原動力のほとんどは各細胞が血液から酸素や養分を受け取り、二酸化炭素や老廃物を排出することによるのである。人間の毛細血管の総延長は約10万kmあり、地球2周半の距離に相当する。身体にある約6兆個の細胞に酸素や養分を届ける毛細血管の太さは約100分の1mmである。そこに水よりも何倍も粘度の高い(どろっとしたという意味)血液を、わずか握りこぶし大の心臓だけの力で循環させていると考えるのはあまりに無理がある。可能であれば、死体のような細胞が自ら循環を行わなくなった状態の毛細血管にポンプを用いて血液を循環させる時に、いったい何ジュール(J、仕事量の単位)を必要とするかを検証してもらいたいものだ。おそらく血圧から算出される心臓が血液を送り込む仕事量の何倍にもなるはずであり、一般的に考えられている心臓が血液を循環させているという常識が覆るはずである。

ちなみに、多くの日本人が心臓が左にあると考えているようで、心臓の位置を正しく把握しているのは医療関係者や救急に当たる人などぐらいである。それぐらい身近で基本的なことが誤解されているのが現状である。(心臓の位置が気になる人はこちらをクリック！)

話を戻すと、おそらく心臓は血液循環のリズムをとったり、きっかけを作っているに過ぎず、血液循環の大部分の役割を担っているのは各細胞だと言える。だからといって、心臓の重要度が低いと言っているのではない。心臓が動かなくなれば、生命活動が維持できないように、新システムにおいて、心臓の役割をする機関が適切に働かないと、各細胞にあたる私たちの生活に大きな影響があることが予想される。

同じく全国銀行協会のページで、銀行の主な役割として、お金を預かる役割とお金を貸し出す役割を挙げている。

新しいシステムでは、お金を預かる必要はない。お金は実体のない数字だけであるので、それを適切に管理さえすればいいのだから。同様に、お金を貸し出す必要もない。貸し出すということは返してもらうということである。しかも、高い利子を取って。身体のシステムにそういったものはない。脳に血液が必要な時には脳に血液が優先的にまわされ、胃に血液が必要な時には脳に血液が優先的にまわされるといった仕組みになっている。返却の必要はない。対価はそれぞれの器官が行う仕事である。

そうしてみると、銀行の働きは民間企業よりは公的機関が担うのが良さそうである。

## 現在の資本主義国家の繁栄は企業の競争による結果ではないのか？ 競争をしなくて進歩があるのか？

今日(こんにち)の科学の発展やサービスの向上は競争によって生み出されたものではないのか？ 競争をやめてしまえば現在の繁栄はなくなり、共産主義社会のようになってしまわないのか？ こうした危惧(きぐ)を抱く人もあるだろう。

このように考える人は、新システムには競争がないと誤解している。競争はある。より多くの支持を集める商品やサービスを提供する会社は繁栄し、社員の給料も高くなる。ただし、収入の上限はある。また、支持の少ない会社であっても、社員が貧困な生活に甘んじなければならぬということはない。現代の社会でもそうであるように、少数でもコアなファン層を持つ商品は生き残り、その生産に携わる企業も社会に必要とされる存在であるのだ。新システムで禁止されているのは無駄な競争であって、互いに切磋琢磨し、プラスになる競争は大いに推奨するのだ。

例を挙げれば、無駄な競争というのは何か？ 例えば、消費者置き去りの競争などは無駄な競争にあたる。近年では、ブルーレイディスク(Blu-ray Disk)とHD DVDとの規格争いなどは、消費者置き去りの、企業間の都合による競争だろう。

無駄な競争の典型的なものは前にも述べたがパイの奪い合いである。

例えば、1人の顧客に対して、A社の保険会社の販売員とB社の販売員とC社の販売員が、ぜひ我が社の保険に加入して欲しいとセールス合戦をすることはしばしば見られる。どの社と契約しても、それほどサービスに大きな差はないとするなら、保険会社間の競争は、社会全体から見ればただ単なる市場の奪い合い、パイの奪い合いに過ぎず、社会全体からの視点で見れば、各社の保険外交員の労働はただ単に国民の総労働時間を増やすだけの労働ということになる。

その対価は必然的に保険料に上乘せされ、実際に保険会社が支払う額は、徴収額の20%程度ということらしい。こうなると、上乘せというようなレベルではない。新システムでは個人が保険をかけなくても、万が一の時には税金が充てられるのである。人体でも、骨が折れれば体内のカルシウムがそこに集まり自動的に修復が行われ、傷を負えば、傷がない状態よりも優先的に血液が集められ、かさぶたが作られ、治される。足の指の先をぶつけた時でさえ、ここに痛みがあると脳に伝えられ、手で摩(さす)るなど、痛みが軽減するまで、脳はその痛みに対して最大限の注意を払う。

そう考えれば、拉致問題に対する我が国の対応も、自殺者の増加に対するそれも、災害発生地に対するそれも、まだまだ他人ごとのような対応でしかないと言えるのではないだろうか。

新システムでは、保険会社はそのノウハウを公務員として、国民全体の経済的保障に関わる分野を担当するのが望ましいのかもしれない。

競争の話に戻ろう。

人間の身体を見ても、右の肺と左の肺が競争することもないし、右の腎臓と左の腎臓が競争することもない。酸素を吸収するという仕事、体液を浄化するという仕事をいかに効率よく達成するかということ、つまり身体全体に貢献することが最優先の課題であるのだ。人間の身体に無駄な競争はないのである。

資本主義社会での競争と新しい経済システム下での競争との違いについて考えてみよう。競争は悪ではないし、それがなくなることは未来永劫ないだろう。だが、競争には望ましい競争と望ましくない競争がある。それは有益な競争と無益な競争と言ってもいいし、適切な競争と不適切な競争と言ってもいいだろう。

その違いはどこにあるのだろうか？ 一言でいうならばベースに「協力」があるかどうかということになる。私利私欲のための競争は望ま

しい競争だとは言えない。同様に、自社の利益のためだけの競争も、自国の利益のためだけの競争も望ましいとは言えないだろう。逆に、望ましい競争とは互いに高めあうための競争とか、社会を良くするための競争とか、何か大切なものを守るための競争である。

新システムでの競争は、いわば誰がより多くの社会貢献をするか、どの会社がより多くの社会貢献ができるかの競争だから、勝者に栄光があるのは当然だが、敗者に惨めな結末が待っているということはない。新システム下での競争のイメージ、つまり適切な競争のイメージはスポーツの試合をイメージすれば分かりやすいだろう。それには3つの特徴がある。

まず、ルールに則った競争であること。適切なルールが無かったり、ルールの抜け道を探したり、見つからないようにルールを破ったりということをしてはいけないことだ。

次に、深刻になりすぎないこと。現行システム下での競争は敗れることは収入を失うこと、社会的地位を失うこと、会社が倒産すること、莫大な借金を背負うことなど、結論が重すぎる。競争に負けた企業であっても、社会に貢献してきたのなら、マイナスを背負うべきではない。スポーツのように、ゲーム終了後は互いに握手し、健闘を称え合い、敗者も次の勝利に向けて清々(すがすが)しいスタートをきれいな敗北であるべきだろう。

最後に、プロセス(過程)を楽しむこと。結果が全てではなく、個人や会社がその社会貢献の中で生き生きとやりがいを持って仕事ができることが重要だ。

根底に「協力」がある競争はそのような健全な競争となるだろう。

資本主義社会の競争がそのような質的変貌(へんぼう)を遂げないと、社会は殺伐(さつぱつ)とし、資本家はますます太り、労働者はますます痩せ細る弱肉強食社会、格差社会になるだろう。そんな冷たい社会システムはもうこりこりだ。

## どうしたら社会を発展させる望ましい競争ができるようになるのか？

まず、確認しておきたいことは、仮にこれ以上科学文明が発達しなくても、何ら問題ないということである。その大前提を抑えておけば、「競争をしなければ社会の発展も経済の発展もない」と反論する人の論が無意味となる。別に発達しなくてもいい。江戸時代の人よりも我々の方が絶対に幸せだと言い切れるだろうか？ これは後述するが、経済の発展など、むしろないほうがいいぐらいだ。今のままで全ての人々が快適で幸せになれる科学技術はほぼ揃っていると言ってよいだろう。もちろん、科学の発達を否定しているわけではない。仮に今のまま停滞しても構わないということを主張しているのだ。極論すれば、人類はもう競争なんてしなくていいステージ(段階)にまで到達しているのだ。

科学を発達させるより、現在の科学をどのように人間の幸せのために使えるかを考えた方が良さそうだ。核兵器を作り、人類は幸せになっただろうか？ 交通網が発達し、短時間で遠くまで移動できるようになり、携帯電話、インターネット、電子メール、ファクシミリなどの通信技術が発達し、それだけ人々の生活がゆとりのあるものになっただろうか？ 効率化のために導入した通信技術がかえって仕事を増やし、忙しくしている側面はないだろうか？

適切な競争の仕方を知らない現代人に、わざわざ競争の仕方を教える必要はない。かといって、幼稚園の徒競走に順位をつけないようにするとか、ゴール前でみんなが揃うのを待って、一斉にゴールするなどといった馬鹿なことをする必要もない。

学ぶとするならば、協力という技術を身につければよいのである。協力ということを学んでいないから、競争の質が落ちるのである。他者と協力したり、社会と調和して生きることができるなら、その人がする競争は質の高い競争になっているはずだ。

## 通貨の価値が減っていきなんて聞いたことがない、そんなのが本当にうまくいくのか？

歴史を紐解くと実際に減価する通貨のシステムが採用された事例がある。

1930年代初めのことである。オーストリアにヴェルグルという小さい田舎町があった。その当方で人口4300人ほどの街だったが、その街も世界大恐慌の影響を受け、約500人の失業者を抱えていた。新しく市町長になったミヒャエル・ウンターグッゲンベルガーは、シルビオ・ゲゼルの唱えた自由貨幣の発行を1932年7月の町議会で決議した。それはスタンプ通貨と呼ばれるものであった。

新町長のウンターグッゲンベルガーは、地域の貯蓄銀行から32000オーストリア・シリングを借り入れ、それを担保として32000オース

トリア・リングに相当する「労働証明書」という紙幣を作成した。町は道路整備などの失業者対策事業を起こし、失業者に職を与えた。そして、その労働の対価をオーストリアの通貨であるリングではなく、労働証明書で支払ったのだ。しかし、それだけでは労働証明書が通貨の替わりになるだけで、何の経済対策にもならない。だが、驚くべきことに、その労働証明書には減価する仕組みが組み込まれていたのだ。

労働証明書は、月初めにその額面の1%のスタンプ(印紙)を貼らないと使えない仕組みになっており、10リングの紙幣は月が替わると0.1リング分のスタンプを貼り付けないと10リング分の紙幣として使えないのだ。言い換えれば、月をまたぐごとに労働証明書は額面の価値の1%を失なうことになる。そのため、労働証明書を手元にずっと持っていたとしても価値が減っていただけなので、それを手にした誰もができるだけ早くこのお金を使おうとし、消費が促進され、実際に景気が良くなった。

どれくらいの効果があったかを具体的に見てみよう。

労働証明書は公務員の給与や銀行の支払いにも使われ、町中が整備され、上下水道も完備され、ほとんどの家が修繕され、町を取り巻く森にも植樹された。この労働証明書発行まで町は税の滞納に悩んでいたが、税金もすみやかに労働証明書で支払われるようになり、中には税金の前払いを申し出る者まであらわれたという。こうして、ヴェルグルはオーストリア初の完全雇用を達成した町となった。

具体的な数字で検証してみると、当初発行した32000リングに相当する労働証明書は、必要以上に多いことがわかり、町に税金として戻ってきた時に、その3分の1だけが再発行されることになった。労働証明書が流通していたのはわずか13ヵ月と半月であったが、その間に流通していた量は平均5490リング相当に過ぎず、住民一人あたりでは、わずか1.3リング相当に過ぎなかった。しかしながら、この労働証明書は、週平均8回も所有者を変えており、13.5ヵ月の間に平均464回循環し、254万7360リングに相当する経済活動を生み出したという。これは通常通貨のオーストリア・リングに比べて、約14倍の流通速度にもなり、大きな経済効果を生み出すことが証明された。

もちろん、ヴェルグルの成功を目の当たりにした多くの都市はこの制度を取り入れようとし、1933年6月までに200以上の都市での導入が検討されたという。しかし、オーストリアの中央銀行によって「国家の通貨システムを乱す」として禁止され、1933年11月に労働証明書のシステムは廃止に追い込まれてしまった。

労働証明書の裏面には以下のように書いてあった。

「諸君、貯め込まれて循環しない貨幣は、世界を大きな危機、そして人類を貧困に陥れた。経済において恐ろしい世界の没落が始まっている。いまこそはっきりとした認識と敢然とした行動で経済機構の凋落を避けなければならない。そうすれば戦争や経済の荒廃を免れ、人類は救済されるだろう。人間は自分が作りだした労働を交換することで生活している。緩慢にしか循環しないお金が、その労働の交換の大部分を妨げ、何万という労働しようとしている人々の経済生活の空間を失わせているのだ。労働の交換を高めて、そこから疎外された人々をもう一度呼び戻さなければならない。この目的のために、ヴェルグル町の『労働証明書』はつくられた。困窮を癒し、労働とパンを与えよ」

## 新システムは金持ちに不利なシステムだと思うが、そうなれば金持ちが日本から出て行かないだろうか？

高所得者からより多くの税を取ろうという議論の際に、しばしば言われることで、テレビの討論番組で「そんなことをしたら、金持ちが海外に出て、結局は税収が減る」という意見がもっともらしく取り上げられるのは何度も見たことがある。しかし、本当にそうだろうか？

累進課税(高所得者ほど税率が高くなる税方式)をきつくしても、国外に出て行く人、出て行ける人はごくごく少数なはずだ。金持ちの多くは、特権的な地位や立場にいるとか、不動産を持っていて汗水たらして働かなくても人並み以上の収入があるとか、親から会社を受け継いだといった人種の人たちで、自分一代で成り上がった人は多くないはずだ。自分一代で人よりもはるかに多くの給与を得ている人でも、それは人の何倍も社会に良い影響を与えたその見返りの報酬ということは少なく、例えば、何とか団体の理事といった立派な肩書きをたまたま手に入れたといっただけで、実際にはほとんど何もしない人が高収入を得ていたりする。

そういった人が日本の税率が高くなったからといって海外に出るだろうか？ 出られるはずがない。役職に対して高額な報酬を与えら



れている人はその肩書きは海外では通用しない。金持ちで海外に出られるのは、本当に実力があり、人一倍働き、能力がある人だけだ。そういった人は少数だし、そういった人は目先の税率などで判断しないのではないかと私は考える。

日本では65歳以上の高齢者が日本のお金の3分の2程度を所有しているとのことだ。貧しい高齢者も多いが、お金を持って余している高齢者も多いのだ。そういったお金を持って余している人から税金をがっばり取ればいい。このお金は一生懸命働いて貯めたものだという主張も当然あるだろうが、貧しい老人に比べて10倍の貯蓄を持っている人が、10倍の社会貢献をした分けではないだろうから。いっそのこと、聖徳太子の古い1万円札をあと3年で期限切れで使えなくなるとでもすればいい。一説によると、約15兆円が聖徳太子の1万円札の状態でタンス預金されているらしい。

### 新システムで経済的問題が解決されると自殺者は減るだろうか？

日本の自殺者は毎年3万人を超え、毎日約100人が自殺しているということになる。自殺原因のトップは健康問題で、その次が経済的問題であり、その数は8000人を超える。

単純に考えると、経済的困難が理由で自殺する8000人の人が自殺をしなくなるなら、自殺者は減るだろうし、その他の理由の人も社会が変われば状況も変わり、自殺者の減少にそれ以上の良い影響を与えると考えられる。この論に賛同できるなら、是非自殺対策や自殺予防を支援する団体はこの新システムの実現に賛同、協力していただきたいと思う。

話が逸れるが、私は自殺志願者が嫌いである。人には様々な死にたくなるような理由があるだろうから、その全てを一律に論じて、全ての自殺が悪だというつもりはない。だが、ほとんどの自殺志願者の意見には賛同できない。批判を覚悟で言うが、自殺志願者の多くは自己中心的で、視野が狭く、必要以上に悲観的である。

私は自殺する権利はあると思う。というか、それを認めるべきであると思う。自殺したい人はすればいいと思う。ただし、条件がある。

自殺するなら人に迷惑をかけずに死んで欲しい。列車に飛び込んで死ぬなど最悪だ。自殺者はその行為がどれだけの人に迷惑をかけ、不快な思いをさせるかを想像できないのである。想像できているのにその死に方を選ぶ人はこの世に存在する価値のない人である。死体を片付ける人、列車のダイヤが狂って大切な予定が台無しになってしまう人、遺族の心情など、想像する力が欠落しているのである。自分に降りかかっている悲劇が全てになって、そういったことが想像できない状態なのだろう。

自殺するなら人に貢献して死んで欲しい。経済的理由で自殺を図る人は臓器提供意思表示カードに全ての臓器を提供すると書いてから死んで欲しい。経済的問題でなく自殺を図る人は子孫に資産を残すことも必要だろうが、その一部を経済的理由で自殺せざるを得ないと考えている人に分け与えて死んで欲しい。それによって、いくつかの命が失われずにすむことだろう。

こう考えてみると、自殺志願者同士でネットワークを作り、お互いに助け合えば、多くの自殺志願者が助かるのではないかと考える。自殺志願者が、自殺を志願していないのちの電話の相談員に相談するよりも、同じく自殺を志願している人に相談したらいいと思う。いのちの電話に電話するぐらいだから、自殺したいという気持ちの中にも、生きられるのなら生きたいという願いもあるのだろう。そういった人たちが助け合えばいい。その助け合いのツールの1つとして、交換マーケットなどを利用してもらってもいい。とにかく、死にたいという人は自分に降りかかっている悲劇にしか目が向いていない。だから、お金を残して死ぬし、健全な臓器を無駄にして死ぬのだ。それを他者に向け、他者の悩みに向けた時、自分の悩みも少しは減るかもしれないし、他者の悩みも少しは減らしてあげられるかもしれない。視点を変えることが思いのほか良い効果を生むかもしれない。

### 新しい経済システムには合成の誤謬(ごうせいのごびゅう)といった問題は生じないだろうか？

(続きを作成中、少しずつ加筆していきます。)